The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生人形の系譜 ： 近現代に生きる等身大人形をめぐる文化史的研究
Author(s)	竹原, 明理
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55676
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　竹原　明理　　）	
論文題名	生人形の系譜－近現代に生きる等身大人形をめぐる文化史的研究－

論文内容の要旨

本論文は、幕末から昭和初期にかけての見世物であった、「生人形」について論じたものである。生人形は「いきにんぎょう」と読み、人の姿に似せて作った人形をさす。「活ける人に向うが如し」と評され、肥後・熊本出身の松本喜三郎が「生人形元祖」と呼ばれている。喜三郎は、さまざまな姿形をした生人形を制作し、種々の場面を見せた。生人形は、幕末・維新の世で大流行し、多くの生人形師が出現し、名を馳せた。特に喜三郎と同郷の初代・安本亀八は人気が高く、喜三郎と亀八は代表的な生人形師として取り上げられてきた。

生人形は近年、美術史の分野において再発見・再評価されつつある。2004年（平成16）には≪生人形と松本喜三郎－反近代の逆襲≫展が、2006年（平成18）には≪反近代の逆襲Ⅱ－生人形と江戸の欲望≫展が、熊本市現代美術館で開催された。これは、生人形を正面からとらえた初めての大規模な展覧会であった。展覧会に際しては、国内外の博物館・美術館において現存作品の悉皆調査が行われ、今まで知られていなかった生人形が次々と見つかり、喜三郎・亀八の故郷である熊本の美術館で展示されたことは、当時、大きな話題となった。近年刊行された美術書では、軒並み、近代美術を語る上での重要な存在として、生人形が取り上げられており、美術の分野において、生人形に対する一定の再評価が定着しつつある。

こうした美術史からのアプローチの根底には、近代以降に形成された「美術」の枠組みによって、生人形が取り上げられなかったことに対する研究者たちの憤りと反省があった。1980～90年代に盛んになった、維新前後の近代美術を再発見・再評価していく動きと重なり、生人形の調査・研究も飛躍的に進んでいった。特に、美術史・芸能史からのアプローチによって、生人形を「美術品」として評価し、見世物興行のなかで展開されたダイナミックな様相が明らかにされつつある。

美術における生人形への再評価が定着しつつある昨今だが、喜三郎・亀八の二大生人形師にばかり注目が集まっている印象はいなめない。そのため、喜三郎・亀八亡き後の生人形は、非常に貧弱なものとして扱われる傾向にある。こうしたことから、申請者は、喜三郎・亀八以後、生人形の一大ブームが過ぎ去った後の生人形に着目し、明治・大正・昭和を経て、現代に至るまでの「生人形の系譜」を描き出すことができないかと考え、本論文の執筆に至った。たしかに、喜三郎や亀八が見世物興行で行ったようなダイナミックな展開はあまり見られないが、喜三郎・亀八以後に広まった、生人形の文化がさまざまな形で現在も残されているのは事実である。申請者は、ブーム以後に生人形は消えてしまったと悲観的にとらえるのではなく、ブームの後にさまざまな形で見世物小屋の外に広がっていった生人形の片鱗・欠片を集めることで、これまであまり意識されることのなかった、さまざまな形の生人形の系譜を明らかにした。美術史や芸能史からのアプローチがメインであった生人形研究だが、本論文によって、新たな視点による生人形研究の可能性を見出すことができるだろう。

以下、本論文の構成を述べておく。まず序論において「生人形とは何か」を詳細に再検討し、これまで以上に幅広い文脈での生人形解釈の必要性を説いた。喜三郎・亀八への美術的評価・注目が高まることよって、彼らの周辺、あるいはそれ以後の展開にはあまり目を向けられてこなかった。しかし、申請者は喜三郎・亀八以後にこそ見世物小屋を飛び出した生人形の興味深い展開を見ることが出来ると考える。生人形の意味変化・役割変化の中で、人々が生人形へ向けるまなざしの変化、生人形由来の等身大人形を手がける人形師の全国的な広がり、菊人形や山車人形の広がりなどをとらえ、現代に通じる生人形の系譜を記述していくのが本論文の目的である。

序論に引き続き、本論文は二部構成となっている。【第１部　生人形と近代化】では、生人形が、近代化の中でどのように変化したかに焦点をあてた。この変化は、生人形が主体的に形を変えていったという意味ではなく、人々が生人形へ向けてきたまなざしの変化と言ってもいいだろう。「第１章　見世物としての生人形」では、生人形の系譜を描き出す前に、再度喜三郎や亀八らが見せた、生人形の見世物興行とはどのようなものであったかを、申請者なりに考察した。「生人形」という語は喜三郎が初めて使用したものとされるが、喜三郎の登場によって、突発的に生人

形が生まれたわけではない。喜三郎以前の見世物の様相と、見世物の外側にある生人形への伏線を、先行研究を交えながらたどり、喜三郎・亀八による生人形興行の流行へとつなげていった。生人形の流行によって、多くの人形師が出たこともあわせて記した。

「第２章　近代化の装置としての生人形」では、見世物として流行した生人形が、文脈によって種々に読み替えられていく様子を記した。これまで指摘されているように、近代化によって、従来の見世物が解体・細分され、意味づけされていく中で、生人形もその枠組みの中で役割を与えられ、その文脈合わせて読み替えられていった。特に、学術模型とマネキン人形はその代表であった。

「第３章　生人形と『芸術』」では、生人形をめぐって、さまざまに交わされる「芸術論」を取りあげた。特に、彫刻と生人形については、現代においても混乱をきたしている。また、昭和初期に展開された、人形改良論に伴う「人形芸術運動」の中でも、生人形はさまざまな形で取りあげられた。これらは、生人形の制作者たちが主体的に交わしているものではなく、その外側で巻き起こったものである。その仕組みは今も変わらない。

【第２部　生人形の系譜】では、本稿のタイトル通り、近現代に生きる等身大人形を、生人形の系譜として文化史的に考察していった。「第４章　生人形文化の広がり」では、生人形の見世物興行の流行を受けて、都市や地方に広がっていった生人形文化の様相をとらえた。江戸の天下祭に由来する、「江戸型山車」と呼ばれる大型の山車人形を乗せた山車の出現、現在もいくつかの地域で行われている菊人形、そして、地方に見られるようになっていった生人形の文化などを取りあげた。

「第５章　現代に生きる生人形」では、まず、関東一円に見られる江戸型山車とは全く異なった形で、地方の祭りに見られる生人形の系譜を記述した。また、職人とは異なった形で引き継がれている生人形の系譜について、「ひらかた市民菊人形の会」の活動から報告した。最後に、現在の博物館・美術館の中で収蔵・展示される生人形について若干の考察を加えた。

本論文における申請者の態度として一貫しているのは、生人形は、「ナマモノ」だということである。その時々で扱い方やとらえ方が違い、意味を変えていくのである。【結論】において、「１．生人形は生きている」とした。過去のものととらえられがちな生人形だが、現代においても、その系譜が脈々と、しかも、さまざまな形で引き継がれているからである。喜三郎の死後、熊本では、喜三郎唯一の弟子とされる江島栄次郎や、亀八の門下である厚賀家の人形師らが、生人形の制作を行った。

1940年（昭和15）には、喜三郎五十年忌の記念展覧会が開催され、喜三郎の遺作、遺品、文献などが出陳された。しかし、喜三郎は、郷土の誇るべき人物として知られつつも、見世物師に対する蔑視によって顕彰されるには至らなかった。当時、熊本日日新聞の記者であった大木透は、入念な取材によって、新聞に「名匠　松本喜三郎」を連載し、『名匠　松本喜三郎』（1952年）を出版した。この間、喜三郎の遺族や弟子の江島が亡くなるなど、喜三郎を知る人が少なくなっていた。

1950年（昭和25）には、熊本県教育委員会によって、喜三郎は、熊本県近代文化功労者として表彰され、晩年、郷土に帰って後進を指導し、「その庶民文化のために遺した業績」が称えられた。1951年（昭和26）には、喜三郎が寄進した≪聖観世音菩薩像≫（来迎院蔵）の修復が行われ、1961年（昭和36）には、≪谷汲観音像≫（浄国寺蔵）が熊本県指定重要文化財（工芸品）に登録された。大木の尽力によって、戦前・戦後と喜三郎の存在は再び熊本で認識され、称えられたが、その後の動きが停滞してしまったのも事実であった。1980年代の終わりになって、再び生人形研究が動きだし、美術史・芸能史からのアプローチが盛んになった。2000年代に入ると、熊本では、来迎院の≪聖観世音菩薩像≫修復のため「松本喜三郎顕彰会」ができ、2004年・2006年には、大規模な展覧会が開催されるに至った。

このように、喜三郎の故郷・熊本においてでさえも、生人形に対する認識は流動的であった。近年の動きから、生人形は、近代美術史の一端に組み込まれることになり、喜三郎・亀八の周辺の生人形師たちの実態調査も進みつつある。生人形研究は、一過性のものであったとする声もあるが、着手されていない領域は非常に広い。

「生人形の系譜」は、球体関節人形や蝋人形、フィギュアなどとも絡めて、サブカルチャー研究などから、リアルな人形の系譜として取り上げられることが多い。しかし、喜三郎・亀八に由来する人形師たちの活動や、生人形が地域を越えて一種の文化として広がり、現代においても続いている様相は、これまでほとんど扱われてこなかった。

美術としての再評価が進むことによって、喜三郎・亀八の評価が高まっているが、それ以外の生人形にまつわる事象を取り上げたのが、本論文である。特に、生人形が一種の文化として地方に広がり、その土地・土地の民俗文化の中に溶け込み、同化している様子を描いたのは、本論文の特徴であるといえるだろう。そして、それらを記録し、記述していくことによって、近現代に生きる等身大人形の文化史的な広がりとして、生人形の系譜をとらえ直すことが可能であることを提示した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　竹原　明理　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	川村邦光
	副 査　大阪大学　教授	杉原　達
	副 査　大阪大学　准教授	北村　毅

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：生人形の系譜
－近現代に生きる等身大人形をめぐる文化史的研究－

学位申請者　竹原明理

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　川村邦光
副査　大阪大学教授　杉原　達
副査　大阪大学准教授　北村　毅

【論文内容の要旨】

本論文では、生人形を幅広く捉えて、その文化的な広がり、生人形の系譜を江戸後期からたどり、現代でも生人形・等身大人形が継承されてきた文化史的プロセスを考察する。序論では、美術史や芸能史、民俗学、見世物研究での先行研究を検討し、本研究の位置づけと研究方法・課題を設定する。生人形の創始者として位置づけられる松本喜三郎と安本亀八以降に多様な形で広がった、生人形の文化的な展開を捉えるために、特に美術史とはやや距離をとり、等身大人形という概念を用いて、生人形の文化史的な地層の堆積を多種多様な領域で発掘し、生人形の系譜を考察することを研究課題として設定する。そのために、生人形・等身大人形の調査を博物館・美術館の所蔵する生人形のみならず、マネキン人形や学術人体模型、祭礼での山車人形、菊人形などに対する文献研究およびフィールドワークによって行なっている。

本論文は第１部「生人形と近代化」と第２部「生人形の系譜」で構成さている。

第１部では、生人形が明治期以降の近代化のプロセスの中で変化していった様相を明らかにする。第 1 章では、張子人形の流れから生人形が登場し、喜三郎と亀八の生人形の見世物興行、それに端を発した生人形の流行によって多くの人形師、特に熊本で絵島英次郎や厚賀貞七などが登場し活躍していったことを明らかにしている。第 2 章では、明治期以降、見世物が近代化によって解体・再編されていく中で、生人形見世物が美術・教育へと接近していくとともに、生人形が特に衛生博覧会での学術模型・人体解剖模型、また百貨店や博物館などのマネキン人形へと転用されていくプロセスを明らかにしている。次いで、第 3 章では、生人形をめぐる芸術論を取り上げる。高村光太郎によるような生人形と彫刻の相違をめぐる西洋的芸術論、また人形改良論から展開された人形芸術運動に関して考察するとともに、このような芸術論や運動には生人形制作者が関わることなく、芸術家や美術評論家の美術・芸術概念またその教育システムが支配していたことを明らかにしている。

第２部では、近現代に生きている等身大人形を生人形の系譜に位置づけて、その文化史的様相を考察する。第４章では、江戸をはじめとする都市の祭礼での山車の作成

に生人形師が関わり、それが地方へと広まっていったことが論じられる。江戸型山車は明治期に関東一円に普及して、生人形師たちが生まれ、現在でも多くの祭礼で健在である。江戸後期に始まった菊人形が明治期に流行し、多くの人形師が生まれ、今でも生人形の系譜を継承していることを明らかにしている。第５章では、地方に広がった山車生人形、生身の人間の生人形、そして「ひらかた市民菊人形の会」の活動についてフィールドワークを通じて明らかにし、現在でも生人形・等身大人形の文化が存続していることを論じている。終章では、これまで述べてきた生人形・等身大人形の歴史的・文化的系譜な展開をまとめて、本研究の意義および今後の課題と展望を述べて締め括っている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、生人形の系譜というテーマを設定して、これまでの生人形研究史の領域を拡大させ発展させたところに大きな特徴がある。とりわけ、生人形を見世物興業から流行し発展した文化として位置づけて、等身大人形を介在させることによって、生人形を美術史的研究の枠組みから解放して、美術や芸術にとらわれない多様な領域と関連させて、歴史学的に文献史料を用い、またフィールドワークによる民俗学的手法を用いて、生人形・等身大人形、またそれを制作してきた人形師の形成してきた文化史を探究したことは評価できよう。以下、本論文で評価できる点について記していこう。

第一に、生人形が美術史における美術・芸術の概念を再検討していく中で取り上げられて脚光を浴びたが、それは松本喜三郎と安本亀八に限定され、喜三郎・亀八以後の生人形が美術・芸術の概念から排除されていったことを批判的に検討し、生人形の系譜として、多種多様な生人形・等身大人形の文化が今日にいたるまで存続していることを明らかにしている。それは生人形・等身大人形を見世物の文化の中に位置づけて、制作者と観衆、そして流通というサイクルの中で捉える視点を提示して、近現代の文化史の豊かな水脈の一端を浮かび上がらせるものになっているといえる。

第二に、菊人形や山車人形、人体模型、マネキン人形など、様々な生人形・等身大人形は、喜三郎・亀八以降にこそ、多くの生人形師が生まれて活躍したことによって現われた、生人形の系譜に連なる文化であり、それが今日でも連綿として続いていることを、生人形師への聞き取りや山車人形の出る祭礼の場でのフィールドワークを通じて明らかにし、先行研究を飛躍させる生人形・等身大人形の研究を新たな視点のもとで一層進展させている。

生人形の系譜の中で、生人形の構造は頭と手足という眼に見える部分、全体像、あるいは人体模型のようなものなどのいくつかの種類また展開があり、それを見世物興行や展示の形態において、いわば体系的にまとめることができるのではないかと考えられる。そして、生人形・等身大人形の作成でのモチーフといえる、制作者、特に依頼者の求める人形の姿また用途において、芝居人形・時事人形・神仏人形・医学人形・商用人形・生身人形などといった、生人形・等身大人形の派生・展開に関して、さらに探究することもできたと考える。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。